

# 對於漢語的標號和點號的併用

——論用法上的歧義

安 本 武 正 \*

中国語には区切り符号が全部で14種類（『新華字典』の附録では「連接号」を加えて15種類としているが、ここでは通説の14種類に従う）あり、それは「口頭上」と「書面上」と言う性質から、「点号」と「標号」の二つの大きな種類に分けられている。点号には「頓号」（、）・「逗号」（、）・「分号」（；）・「冒号」（：）・「句号」（。））・「問号」（？））・「感情号」（！）の7種類、また標号には「引号」（“ ”または‘ ’））・「括号」〔（ ）〕）・「省略号」（……））・「破折号」（——））・「書名号」（《 》または〈 〉））・「間隔号」（·））・「着重号」（·）の7種類が含まれている。

そもそも現在通用している区切り符号は、「中央人民出版総署」が1951年9月26日に公布した『標点符号用法』に基づくものである。『標点符号用法』では大綱的見地からその条文や説明を必要最少限に止めてあり、これはまた本質上やむをえないことである。だが、実際に使用されている場合を見れば、その枠を越えた様々な実例があり、この小論で述べる標号と点号の併用もそのひとつである。この併用について論じている論文や著書は、わが国ではいまだないが、中国では幾多のものが見られ、しかもそれらを見た場合、諸々の異なる説があり、時には正反対なものさえある。

従って、この小論では中国で発表されている論文や著書を踏まえながら、筆者自身の考えを試みるものである。

對於研究現代漢語の標點符號問題，據我國的情況來看還未能引起應有的重視，因而也幾乎見不到有關這一方面的論文或著作。這一點，在中國就顯然不同。在中國出版的雜誌和書籍中，會看到不少論述着有關標點符號的問題，就拿最近出版的一些語法書來講，其中的絕大多數也都設着專講標點符號的一篇。從這些情況也可以理解到，中國的語文界是如何重視着這一項工作的。即便是如此，還有些地方是存在着問題，也需要加以探討的。比如，在本文所要談的標號和點號之間的關係，也是值得研究的一點。

現代漢語的標點符號用法是依據“中央政府出版總署”在1951年9月26日公佈的《標點符號用法》（以下簡稱《用法》）為基準的，它可以說是標號符號用法的“憲章”或者是“大綱”，也出於它的這種性質的理由，並未把所記載的十四種符號<sup>(1)</sup>的有關活用方面加以詳細地解釋，因此在實際的用法上就產生了許多歧義——特別是在點號和標號的併用上。

根據上述的情況，本文在形式上分（一）引號和頓號、逗號、句號的併用，（二）括號和逗號、句號的併用，（三）破折號、省略號和逗號、句號的併用；在內容上，一方面取出有關上述三點的各種不同說法，另一方面把它們對照着《用法》的解釋來加以分析，並提出筆者個人的一點粗淺的看法，試述一下點號和標號的併用的問題。

在引號和點號的關係上，主要的可取兩個問題，一個是引號和頓號的併用，另一個是引號和逗號、句號的併用。

\* 八戸工業大学一般教育部